No.4
January 20, 1989

EAJ Information

特別講演

1988年10月13日(木)・臨時総会(京都銀行協会 銀行会館)

講師・題目

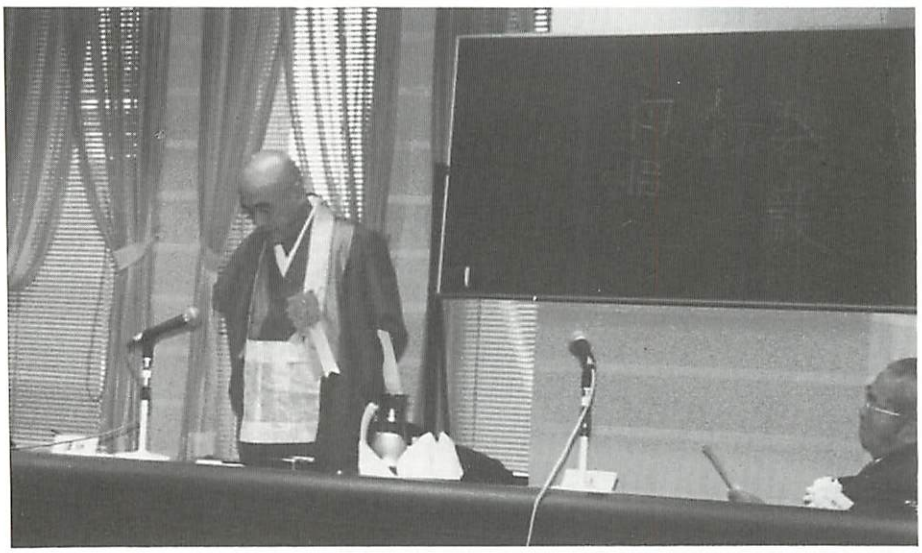
「禅　　窓」

平　田　精　耕(禅文化研究所理事長・天竜寺僧堂師家)

日本工学アカデミー
THE ENGINEERING ACADEMY OF JAPAN

禅　窓

禅文化研究所 理事長
天竜寺僧堂師家　平　田　精　耕



司　会(高村仁一 理事)　只今から平田精耕老師の特別講演をお伺いいたします。演題は「禅窓」でございます。

平田老師は当代きっての禅の指導者でございまして，今さらご紹介申し上げる必要もないかと存じますが，簡単にご紹介申し上げます。

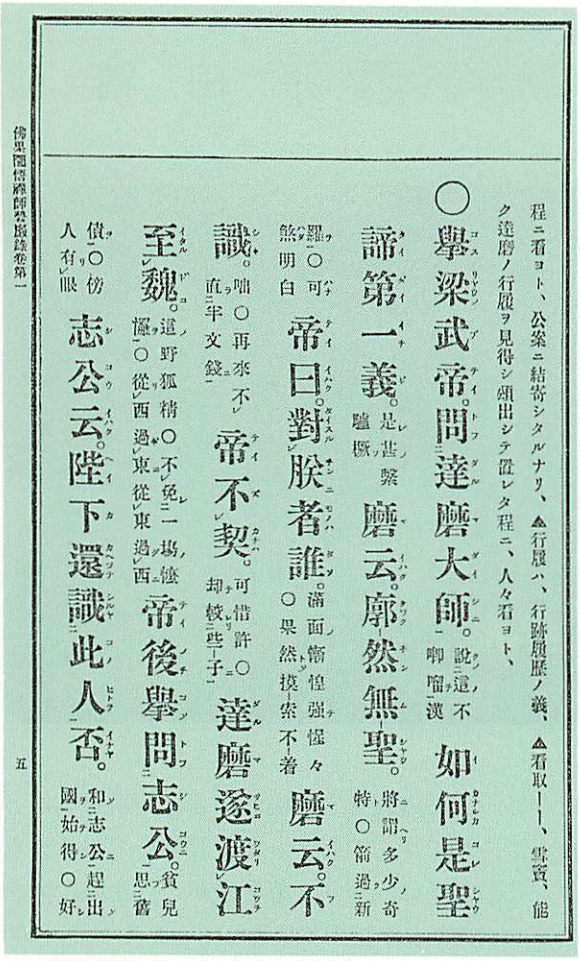
老師は京大文学部の哲学科を出られまして，西田幾太郎，鈴木大拙それから久松真一，西谷啓治という諸先生の流れの中で，現在，天竜寺の僧堂師家――すなわち修業僧の指導者であられまして，また，臨済宗全体の禅の研究機関の総帥として，禅文化研究所の理事長をしておられ，また，花園大学の教授もしておいででございます。非常に多面的なご活躍をしておられ，最近では『禅語辞典』を――禅の言葉を非常に明快な解説をしておられる本でございまして，――この8月に出されたばかりでございます。その外に『碧巌録』の現代語版というものを出されたり，多数の著書をお持ちでございます。

老師はドイツに昭和36～38年くらいまで，招かれて留学されまして，ドイツ語が非常にお上手でございます。そういう関係もあって，ヨーロッパには再三お出でになって，最近では東西霊性交流――特にキリスト教の中でカトリックとの霊性交流をなさっておられます。臨済宗と曹洞宗が一体となって，たくさんの方と一緒に渡欧しておられます。このように臨済宗と曹洞宗がご一緒の行動をするのはなかなか国内では難しいんだそうで，600年来なかったことだということを伺っております。

老師，どうぞよろしく。

嵐山の天竜寺の平田でございます。どうもきょうは立派な方ばっかりなので，何をお話してよいか，ちょっと見当もつかない上に，殊に工学というのは全く私とは無縁でございまして，自然科学とか工学村からはずれた，一介の僧侶でございますので，皆様のお役に立つようなお話ができるかどうかわかりませんが，小一時間，私がずっと自分で勉強してまいりました「禅」についてお話し申し上げたいと思います。

ただ，時間が大変限定されております。それを知らずに刷り物をたくさんつくらせ，皆様のお手元にお渡しいたしました。もう，これは読むだけで時間が終わってしまいますので，そのうちの1枚分のものだけを見ていただくことにします。あとはお帰りの新幹線の中でお読みいただければ結構かと思います。


程ニ看ヨト、公案ニ結寄シタルナリ、▲行履ハ、行跡履歴ノ義、▲看取――、雪竇、能ク達磨ノ行履ヲ見得シ頌出シテ置レタ程ニ、人々看ヨト、

○舉梁武帝。問達磨大師。卿嚕漢。設這不如何是聖諦第一義。足蓋繫驢橛。磨云。廓然無聖。將謂多少奇特。○箭過新羅。白帝曰。對朕者誰。滿面慚惶。強惺々。○果然摸索不着。磨云。不識。喃。○再來不直半文錢。帝不契。可惜許。○却較些子。達磨遂渡江至魏。這野狐精。○不免一場。饒。○從西過東。從東過西。帝後舉問志公。貧兒思舊債。○傍人有眼。志公云。陛下還識此人否。和志公起出。國始得。○好。

テキスト　碧巌録巻第一
第一則 達磨廓然無聖

それにしても，この1頁をお話しいたすだけでも数時間かかりますので，ほんのかいつまんだお話し，それに昔の「禅」と言われる仏教思想が，現代社会にどのような関係を持っているのかといった，そんなお話しを少ししてみたいと思います。

中国の新聞記者からの質問

ちょうど去年の秋，北京の光明日報から2人の新聞記者が私のところにまいりました。ご承知のように中国は，今，日本に非常に熱いまなざしを向けているそうで，そのうち政治や経済のことは東京で取材をしたらいいんですが，文化についてはやっぱり京都だろう……と，やってまいりました。1日目は，国際日本文化研究所の梅原さんのところにいろんな話を聞きにいったらしいんです。2日目に私のところにやってまいりまして，二つの質問をいたしました。

その一つは，日本は明治以後，近代国家として著しい発展を遂げたが，そういう日本の発展と，従来日本に明治以前からあった伝統文化，これとはどういうつながりがあったんだろうか。――これが第一の質問でありました。

それから，第二番目は，似たような質問ですが，1945年以来――戦後，あの貧しい日本の国が，わずか40年足らずで大変な経済大国になった。これは日本の伝統文化とどのようなかかわり合いがあったんだろうか。あるいは，むしろ，そういう伝統文化を全部除き去ったから，それで日本の経済発展があったのか。そうでなくて，やっぱり，深いかかわりがあったとすれば，それはどういうものであったんだろうか。このような質問を二つ受けました。

もちろん，私は経済や政治のことはわかりませんので，仏教――その中でも殊に「禅」という立場から多少の説明をしました。そんな話を含めまして，少し「禅」の話をしてみたいと思います。

碧巌録第一則

それでは1枚の方をごらんいただきたいと思います。その大きい字で書いた部分を読んでまいります。

「挙ス梁ノ武帝。達磨大師ニ問ウ。如何ナルカ是レ聖諦第一義。磨云ク。廓然無聖。帝曰ク。朕に対スル者ハ誰ゾ。磨云ク。不識。帝契ズ。達磨遂ニ江ヲ渡リ魏ニ至ル。」……

まだありますが，これだけぐらいしかお話しできないと思います。

これは禅の中でも大変有名な『碧巌集』から引用したものであります。これはまた『碧巌録』とも申しておりまして，中国の1300年――ですから元の時代に出版された書物でございます。これは禅の課題というか，問題のようなものを100種類集め，これにこの本が出来上がる300年ほど前の

北宋の時代の円悟 —— この人は大変な学僧でありますが，円悟はその100種類の問題について，現在の言葉で言えば「講義」をいたしました。その講義録を弟子が集め，そして出版した書物，これが『碧巌集』あるいは『碧巌録』であります。最近は，大変世界的にも有名になりまして，英語の翻訳もございますし，ドイツ語も，これはご承知の方があるかと思いますが，戦前に日本におられたウイルヘルム・グンデルト，この方は大変有名なドイツの日本学者ですが，この100則を全部訳するつもりで，91歳まで一生懸命漢文をドイツ語に直しておられました。私，ちょうど行きましたときにお手伝いしてきたんですが，残念ながら，三分の二のところで亡くなりまして，そのあとをフランスのある東洋学者が続けてドイツ語で翻訳しました。これも完訳になりました。したがって，英語とドイツ語では全巻翻訳書が出ております。本日はその一部を，禅の心のようなものをさぐる一つのよすがとしたいと思い，持ってきました。

「碧巌」という名前は大変面白い名前で，夾山（カサン —— 湖南省）という美しい山の中で霊泉院という禅寺がありまして，その寺で講義をしたのでこの名前が付いたそうです。霊泉院は水成岩質の山なのでしょう。緑礬岩のような山らしく，有名な禅の言葉で，「猿，子を抱いて青峭（セイショウ）の後（シリエ）に帰り，鳥，華を含んで碧巌の前に落つ」という聯が山門の両側にかかっていたところから『碧巌録』あるいは『碧巌集』という名前がつきました。

ところが，禅はご承知と思いますが，大変実践をたっとぶ仏教でありまして，「坐禅」が中心になっております。坐禅をいたしますときに，書物を読んだり，本を研究したりすることは修行の妨げになる，という一面がありまして，昔から禅という仏教は，旗印として「不立文字」（フリュウモンジ）ということをよく言います。これはあまり文字には頼らない，あるいは文字を立てないわけです。

そういう伝統がありまして，せっかく円悟和尚が立派な講義をし，弟子が集めて出版しようとしたにもかかわらず，円悟の直弟子に大慧（ダイエ）という人がいて，「こういうものは修行の妨げになる」と言って，せっかく先生の講義録を集めたものの，その版木を全部燃やしてしまったという歴史的な事実があるんです。これを焚書と言います。

この焚書の習慣は中国には昔からあったようで，私も20数年前に中国に行きましたとき，ちょうど文化大革命の真っ最中で，北京に参りましたら，例の郭沫若さんが，今までつくった自分の詩や小説は，すべてブルジョア主義であったと言って，天安門で紅衛兵の前で焚書にしている光景に出くわしました。別に驚くことはないんで，中国は伝統的に焚書の習慣があるらしいんです。

禅の世界では，すでに宋の時代に，せっかく師匠の円悟がつくった『碧巌録』を，弟子が全部版木を焼いてしまったと，こういうようなことがあったわけです。したがって，円悟は11～12世紀の半ばにかけて生きた人ですが，改めて『碧巌録』という書物が一般に出されるのは，それから約250～300年後になっております。

ここが難しいところで，「文字に頼らん」と言いながら，禅の仏教ほどたくさんのテキストを持っている宗派は他にないわけで，現実には，文字が邪魔になりながら，やっぱり文字を外しては，行くべき方向もわからない —— という，二律背反みたいなものが「文字」とか「言葉」は持っているのではないかと思います。

『碧巌録』の中には100種類の禅のエピソードのようなものが入れてあって，それに一々円悟が講義をしたり，コメントしたりしたもの，それを集めて『碧巌集百則』という100種類の禅の物語になっております。

その第1番目が今読みましたものでして，その続きは，別刷のものに訓読をし，訳をつけておきましたので，興味ある方は，自宅にお帰りになってから読んでいただくと面白いのではないかと思います。

さて，文章に戻りまして，最初の「挙ス」は挙げることで，問題を提起してみるという意味です。

「梁ノ武帝。達磨大師ニ問ウ。」—— ちょうど，達磨というインドの僧侶が中国に参りましたのは，はっきりはいたしませんが，紀元6世紀前半であったと，いろんな本で伝えております。当時の揚子江の南側は梁という国であったんです。北側の方を魏と呼んでいました。その梁にインド

僧の達磨が初めて入ってきたと伝えられております。ご承知のように仏教は，釈迦がインドで興したものでありますが，その釈迦がいつごろ実在したか，学術的にはいろいろ問題があるようで，新しい説と古い説とでは100年もの隔たりがあって，よくわからないんです。古い説では，大体紀元前550～450年と言い，新しい説では紀元前450～350年と，100年の隔たりがあるんです。よくわからないが，中をとりましてほぼ紀元前500年前後といたします。そのころに釈迦がインドで初めて「仏教」という宗教を開くわけです。その釈迦が亡くなってから800年ほど後に，インドの仏教が，今のシルクロードを通って中国大陸に流入してまいります。当時のことでありますから，釈迦の教えが，熱帯樹のバイタラ（貝多羅）という葉っぱに書きつけられ，それをたくさん積んだラクダがシルクロードを越えて中国にやってくるわけです。

紀元後300年とか400年代に入って，中国の仏教僧たちは，盛んにインドから入ってきた経典の翻訳を始めます。もちろん，これは古代インド語――いわゆるサンスクリットで書かれておるものですから，中国人には全く外国語でありますが，ご承知のようにシルクロードは当時の貿易の要衝であって，西の方からインド人やペルシャ人，最後にはギリシャ人までがそこを通って中国に入る。あるいは中国人が西の方に向かって，シルクロードを通ってインドやペルシャへ向かうわけで，言うなればシルクロードの沿道は，国際的な要衝であったわけであります。その沿道に住んでいる人たちは，多少中国語もわかるしインド語もわかる――という人たちでもあったわけです。こういう人たちが中心になり，古代のインド語――いわゆるサンスクリットで書かれている仏教経典――つまり，釈迦の教えが，中国語へどんどん翻訳されていくわけです。

この翻訳を始め出したのが大体紀元後350年頃で，これはもうはっきりしております。それから，400～500～600年代にかけて，盛んに釈迦の教え，経典が翻訳されるんです。これを経典翻訳の時代と呼んでおります。したがって，当時の中国の坊さんたちは，今で言えば大学の宗教学か仏教学の先生方のような人たちばかりであったわけです。

インドで開かれた，インドの宗教的な教えが，そういうことを通して中国人に紹介されるわけですが，かつて中国になかったようないろいろな思想がその中に盛り込まれているわけで，非常に中国人は，今の言葉で言うとカルチャーショックを受けるわけです。一番仏教を通してインドの宗教思想で中国の人たちがカルチャーショックを受けたのは「輪廻の思想」です。

輪廻というと，ご承知の六道輪廻――現世で悪いことをしたら，来世は地獄に落ちる。そう大して努力もせずに，のうのうとしておりながら，三井か三菱の家に生まれる人は，よほど前世でよいことをした結果である。そういって現世で贅沢三昧をし，勝手な放埒三昧なことをしていると，そういうことが報いになって，今度は来世で地獄へドサンと落ちる。「過去」，「現在」，「未来」といっても，生まれる以前の世界と現世，それから，生まれかわる来世の三世にわたって人間存在を解釈していこうという，このインドの考え方は，仏教が入ってくるまで中国にはなかったわけです。したがって，古代中国の人たちは，インドから入ってきた仏教，あるいはインドの宗教思想に非常なショックを受けるわけです。

それ以前に，もちろん，中国には儒教・道教があったわけですが，道教や儒教は，事柄――ことに儒教は道徳思想でありますから，善悪の問題は説きますが，そのように「良いことをして，悪いことを止める」――「勧善懲悪」となると，そういうことを一般庶民に教えていく積極的な力がないわけです。

中国人は非常に巧みな民族で，直ちに勧善懲悪に輪廻思想を取り入れたわけです。そして，現世で悪いことをしたら，来世で地獄に落ちるぞ。だから，現世ではなるべく良いことをしなさい。そうすれば来世は極楽に生まれるであろう……と，こういうふうに実に上手に輪廻思想を使ったわけです。

然し当時の中国の仏教僧たちは，大学教授というか，学僧たちばかりであったわけです。ところが，宗教というのは学問じゃございません。本当に大学の仏教学の権威者が悟りを開いているかどうか。本当に宗教学の教授が真の信仰に徹してい

るかどうか，これはわからない。学問的にいろいろなことを知っていても，本当の宗教の世界 ── 大悟徹底の世界とか信仰一乗の世界となってくると，これはよくわからない。むしろ，それよりは，目に一丁の字も知らない，九州の山奥で，大根を掘りながら，朝から晩まで念仏を唱えている“念仏婆さん”の方が，ずっと念仏一乗の信仰に徹していることもあり得るわけですから，実際の宗教と学問とは，全く違うわけです。

中国人は，ご承知のように中華思想を持っているわけで，文化の華は中国大陸のど真ん中にしか咲いていないと，彼らは考えていたわけです。中国の周囲 ── 東夷・西戎・南蛮・北狄で，東西南北は全部野蛮人という考え方は，昔から中国にはあったわけです。インドというのは遙か西の方であって，言うなれば，直接インドから入ってきた仏教は，西戎（西のエビス）の宗教であり教えである。そういう考え方が徐々に中国民族の間で起こってくるわけです。そしてちょうど紀元6世紀のころ，中国の仏教僧の間で，「こんなにインドから入ってくる経典の解釈や文字の解説ばかりやっていたって仕方がない。それより，釈迦が本当に到達することのできた大悟徹底の世界に入るのは，釈迦が言った言葉や教えだけを追求していても得られるものではない」……「じゃぁどうすればよいのか」「それは，実際に釈迦の行じた行を行ずること。これが最も手っ取り早いんではないか」と，こういう反省のようなものが起こるわけであります。

と同時に中国人は「中華」の思想を持っておりますから，「インドの仏教なにするものぞ」……という気持ちがあるわけで，“中国仏教独立運動”なるものが紀元6世紀のころに起こってまいります。これは「もう，経典の解釈や研究などはどうでもよい。実際に釈迦が行じた行をみずから5尺の肉体でやることだ」と，そういう考え方が起こってくる。それがちょうど紀元6世紀の初頭なんです。いわば「不立文字」という ── もちろん，この言葉は後世の人がつくった言葉ですが，「不立文字」という禅仏教の一派の旗印は，その辺のことを物語っているようなんです。

ちょうど達磨という風変わりなインド僧が中国に入ってきたのは紀元6世紀の初頭 ── といっても，書物によって入った年代が細かくは違うんですが，ほぼ紀元後の520～530年。ですから，6世紀初頭というところでは一致するわけです。

達磨は今の南シナ海を通って広東省に上がり，それから金陵（今の南京）までやってきたとテキストに出ています。当時の国は梁と言い，武帝が治めていました。武帝はその名に「武」とあるが，なかなかの文人であって，たくさん翻訳された仏教経典を学者から勉強しているんです。さらに，みずからも臣下を集め，有髪のまま袈裟を着けて，「放光般若経」の講義までしたとあります。非常に仏教通の天子であったわけです。さらに，国を護るのは仏教の教えを中心に政治をとり行うべきであるという原則を持っていた人なんです。

そこへ達磨という大変変わったインド僧が，ふらりと南京へ入ってきた。当然，梁の武帝は関心を向けるわけです。一日，宮中にインドから来た坊さんをここへ呼んでこい，問答をしてみる……というところからこの物語が始まるわけです。つまり「梁ノ武帝。達磨大師ニ問ウ。」という問答の始まりです。

「如何ナルカ是レ聖諦第一義。」──最初に梁の武帝がいった言葉です。「聖諦」の“聖”は「神聖」の意味であり，“諦”はアキラメルと日本語では読みますが，もちろん諦める（ギブアップ）意味ではなく，ここでは「明らかにする」の意味です。明らかにしてからギブアップするのならいいが，最近の日本語の使い方としては，明らかにせずにギブアップする諦める方になってしまったんです。そして，「明らかにする」の意味から「真実」とか「真理」の意味になります。つまり，“聖諦”は「神聖なる真理」の意味です。“第一義”は言葉どおり「第一番の意義」で，「最も第一番の，絶対の神聖なる仏教の真実とは何か」という質問になります。つまり，最も仏教において尊ばれねばならない神聖なる第一義の真実とは何であるかということです。また，“第一義”は宇治の黄檗山万福寺にお見えになると，山門の扁額に「第一義」の額がかかっております。

この問いに対し，一風変わった達磨の返答が大変面白い。それが「磨云ク。廓然無聖。」です。

“廓然”は「カランとしている」の意味で，講義が終わって全員がいなくなり，部屋がカランとしていることがその意味です。続く“無聖”は「神聖なものは何もない」ということです。ここのところが大変面白いんです。

宗教と言えば，神聖な絶対的実在が第一義であるべきで，殊にヨーロッパの宗教学と宗教哲学の考え方でいけば，「真・善・美」に対して宗教は「聖なる存在」がその第一義でして，「神聖なる絶対的実在への畏敬の念が宗教である」とは，これはドイツの有名なシュライエル・マッヘルの「宗教」に対する定義です。ところが達磨は「神聖なものってのは一つもない。カランとして何もない」と答えたわけです。これには今まで一生懸命になって仏教の勉強をし，「神聖なる第一義」を求めていた梁の武帝は頭を引っぱたかれたような思いをしたわけです。絶対実在などというものは絶対にないというわけです。

西田先生の「絶対無」というような哲学的な言葉はこの辺から出てくるんだろうと私は思うんです。私の指導教授であった久松先生は，「東洋的無」という言葉をお使いになっておられましたが，これが達磨の言った“廓然無聖”で，これがまた仏教，殊に禅という仏教の本領とするところであります。

ところが，梁の武帝は「一切空」あるいは「絶対無」といった世界が認識できていなかったわけで，大変驚くわけです。そこで「帝曰ク。朕ニ対スル者ハ誰ゾ。」となるわけです。つまり，「それでは尋ねるけれども，オレの前に坐っているお前さんは一体何だ？」というわけです。インドの聖者という触れ込みで中国に入ってきているお前さん，それでは「神聖なるものは何もない」という世界に「聖者」はあり得ないではないか。それではいったいお前はどういう存在か……という意味合いが含まれているわけです。

すると達磨の返答がさらにふるっている。「磨云ク。不識。」——これは日本語でもそのとおりで，「知らんわい」なんです。これはよく坊さんの世界などで言うんですが，関西で若い女の子に，「お前，あの男が好きじゃないのか」と言ったら，「知らんわ」ってよく言います。これ，知らんわけじゃないんです。そういう語感の響き，あるいは「よう言わんわ」という京都弁がありますが，そういう響きも持っている言葉，それが「磨云ク。不識。」ですね。

「帝 契ズ。達磨遂ニ江ヲ渡リ魏ニ至ル。」——“契 ズ”は「うまく縁が合わなかった」の意味で，梁の武帝と達磨大師とはどうにも話が一つに合わなかったということです。ついに達磨は“江”（揚子江）を渡って北の魏の国へ行ったというわけです。

「面壁九年」

揚子江の北岸に嵩山少林寺というのがあります。最近では，若い学生たちが少林寺拳法——空手をよくやるんですが，といって別にこれは達磨とは関係がないんです。あの当時はお寺にたくさんゲリラが入ってくるので，今で言うガードマンのような役をしている人がたくさんお寺にいたんです。この人たちの間で使われた武術が拳法で，これが後世に伝わって少林寺拳法という名前になったんだろうと思うんです。この少林寺に入って，有名な「面壁九年」——カベに向かって9年間坐禅をしていたというんです。釈迦は悟りを開く前に6年間，大雪山に入って，苦行者について坐禅をしているんです。そうすると，ヘタに釈迦の教えの後を追って，言葉の意味を理解したり，解釈したりするヒマがあったら坐禅をしている方がもっと直接ではないか。こういう考え方を中国の僧がしたことは，これはもう間違いないわけです。

「面壁」も「壁観（ヘキカン）」という坐禅の瞑想法であって，メシも食わずに9年間ジーッとしていることは，これはできません。「壁観」という瞑想法を9年間やってたと理解できるわけです。日本人で達磨さんをご存じない方はだれもないんで，この「面壁九年」の間にいろいろな中国風のエピソードが加わり，坐禅をずっとしていたので，足が腐ってしまったとか，他の仏教僧がやってきて，問答をして，ハラが立ってモノを投げつけられた。それで歯がみな折れてしまったとか，9年間，口をへの字に曲げて坐禅をしていたので，口辺に白いカビが生えたといった，中国風の付け足しみたいなことがたくさん書かれてあるんです。

確かに「達磨」のような仏教僧が実在したことは言い得ると思うんです。達磨という名前にかこつけておりますが，「実践」を学問や経典の研究よりも尊重する仏教の一派が中国で改めてできた。これが後に禅宗という仏教の一派になります。そうして，唐の時代から北宋・南宋・元の時代にかけ，中国大陸で大変大きな勢力を持つようになります。したがって，禅の仏教は中国で成立した仏教であって，インドの仏教そのものではないわけです。唐・宋の時代を経て，仏教が入る以前に中国にあった道教や儒教というものが，インドから入ってきた仏教と一体になって出来上がった仏教の一派，それが禅宗と見ることができるのであります。

ご承知のごとくインド人と中国人とでは民族の系統は全然別であります。インド人は大変瞑想好きで，形而上学とか哲学の好きな民族ですが，逆に中国人は，七面倒くさくって，煩雑な哲学とか形而上学を余り好まない民族です。どちらかと言えば，実践とか実際性を重んじる民族で，これは今も変わりないと思うんです。儒教は道徳思想であって，形而上学や哲学のようなものではないわけです。中国に起こった禅の仏教は，インドで起こった非常に哲学的・瞑想的な仏教から一転し，哲学というより，今の言葉で言えば「実学」と見ることができると思うんです。殊に禅の仏教は，煩雑な形而上学とか哲学といったものを嫌うという，そういう伝統を昔から持っていたんです。そこから「不立文字」という言葉が後人によって出てくるわけです。そしてそれを達磨という人の言葉としたのでしょう。

達磨はこのようにして禅の開祖となるわけですが，9年間じっと坐禅をしていたので，目ばかりギョロギョロ剝いて，頭はツルツルにこっ禿げて，足は立てなくなってしまった。ヒゲをぼうぼうと生やしている。こういうイメージが，いつの間にか達磨という人につけられたわけです。禅寺に行くと，必ず達磨の絵がかけられてあります。

日本人で達磨さんをご存じでない方は1人もないわけで，やがてまた選挙があるでしょうが，選挙になると必ず政治家は，事務所に張子のダルマを置いて，当選したら目を入れて万歳三唱をするのであります。群馬県の高崎市には張子のダルマの名産地があるし，我々が生まれましたら，すぐ膝に抱かされたのは起き上がり小法師の人形ですし，「ダルマさんダルマさんにらめっこしましょ」……とあやされて大きくなったものですけれども，案外，日本人で，達磨が禅の開祖であることをご存じの方も，これまた余りないんです。

また達磨は，余りにもたくさんのエピソードがつけられたものですから，達磨なんていなかったのではないかなどと，しきりに言われるわけです。もちろん，9年間坐禅し，歯を折られたという達磨は居なかったかもしれませんが，実践を重んじた1人の仏教僧が出て，そして実学の仏教というものを中国で起こしたということ，これは確かにあるわけです。どうもこれが後の中国の禅寺のモデルになってくるわけです。日本にも鎌倉・室町時代に禅が入ってまいりまして，現在までそういう禅の実学の伝統は，ずっと伝えられているわけであります。

6世紀というのは，世界全体から見ても，重大な時期じゃないかと私は思うのでありまして，キリスト教にも似たようなエピソードがあります。エルサレムの岩窟の中に，ある日1人の聖者が住みついて，朝から晩まで聖母マリアを念じていた。その人は，やっぱり目を剝いて，ヒゲをぼうぼうと生やしていた。それが紀元6世紀の初頭と伝えられているんです。最近では「キリストの達磨」という名前まで言われるようになっております。このキリストの達磨と言われる聖者の生活が，そのまま中世のカトリックの修道院の生活規範になるのです。したがって，向こうの修道士たちがアゴに長いヒゲをたくわえているのはその伝統だというんです。

どうも後世の教団の出発点になった時期，これが6世紀初頭のころではないか。洋の東西を問わず，そういう時期が500年代に当たるのではないかと，私は類推するわけです。

この達磨はエピソードがあって，120歳まで生きてこの世を去ったというんです。さらに尾ヒレが付いて，120歳で死なずに，そこで弟子をつくって，日本海を渡って日本に来たとの説まであるんです。これは古今和歌集に出てくるんだそうでして，奈

良の道端でヒゲ面の男が，コモをかぶり，いつも横になってゴロリと寝ていた。それがインドから中国，中国から日本へ渡ってきた達磨である……ということが，まことしやかに書かれてあるんです。このようないろいろなエピソードがあります。

「作務精神」

達磨の話で時間がどんどん過ぎてしまいました。もとの話に戻りまして，光明日報社の人たちが，戦後，日本の経済発展をしたのは，伝統文化とどう関係するのか……ということのお答えを結論にしようと思って禅の話をしている間に時間がたってしまったんですが，今，日本では「働くこと」が何か悪いことみたいに考えられている一面があると思います。禅は実学であって，中国に入ってから非常に「働くこと」を尊重している宗教なんです。これを「作務(サム)」と言っております。

唐の時代に百丈懐海（749—814）という立派な和尚がおりまして，この人は「一日作さざれば一日食らわず」と言う原則を立てたのです。昔，インドでは坊さんは働いてはならなかったんです。働くと所得が得られる，するとその財産に執着心が起こる。それで僧侶は働いてはいけなかったんですが，これが中国に入ってまいりまして180度転換をするんです。坊主といえども「一日作さざれば一日食らわず」ですから，仕事をしなかったらメシをくったらいけない，という原則に転換してしまったのです。坐禅よりはむしろ労働の中で仏法を求めるということが，しきりにやかましく言われ出すのが8～9世紀にかけてなのです。

当時の禅僧は，山に入って木を切ったり，畑に出て耕やしながら，額に汗を流しながら問答商量をしているんです。あるいは茶園に入って茶を摘みながら問答している。こういうことを作務と呼んでおります。「百丈作務」の精神と言いまして，これは日本に入りましてもその伝統は伝わっており，現在の禅の道場は，夜は坐禅をいたしますが，昼はよく労働をいたします。労働は，坐禅をしているよりもっと仏の道を求めるのに適した世界である。これを我々は「作務精神」と呼んでいるんです。実に我々禅の修行僧は，昼，よく労働いたします。働くことはよいことだ，働くことは神聖なことであるとの考え方が，我々の宗教の世界には伝統的に伝わっているんです。

もちろん，禅は先ほど言いましたように実学ですから，儒教の精神もその中に入っているわけです。儒教では「苦学力行」── 苦学しながら，体を使いながら勉強することを非常に尊敬しました。こういうものが日本人の労働観に深く根づき，現在まできたと思うんです。

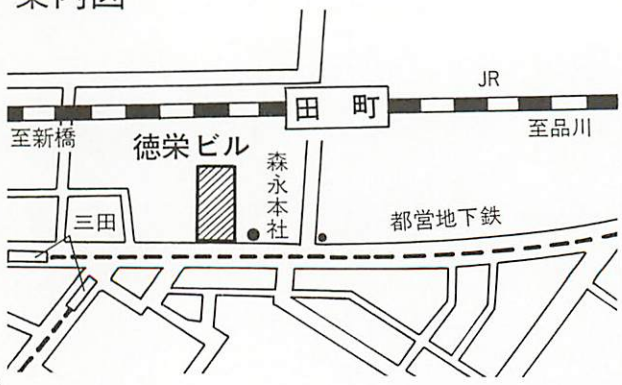
世界の人よ「よく働き，よく遊べ」

「戦後，日本が非常に経済発展をしたことは，やはり，労働は神聖なりという気持ちが根深く日本人の心の中にあったからではないだろうか」と，そのように光明日報の記者にお答えしたわけであります。

実は「労働」の話をしようと思ったんですが，これ以上すると皆様のプログラムに差支えがあるそうなのですが，ただ，日本人が「遊べ，遊べ」……と言うのを小耳にはさむんです。我々禅僧から見ますと「とんでもないことを言っている」と思うんです。もちろん，働き過ぎてジャパン・バッシングが始まったわけでありますけれども，言葉をかえて言うと，昔から「よく学びよく遊べ」という言葉がありますけれども，やっぱり，よく働きよく遊べという，そういうことがいいんではないか。日本人のみならず，世界の人が働くことを忘れてしまったら，人間としての一つの哲学を忘れるのではないか。労働はやっぱり肉体を通しての一つの哲学であると思います。だから，「よく働きよく遊べ」と。そんなことが今後の日本人が向かっていくべき方向ではないだろうかという気がいたします。

お話しが途中で途切れて達磨の話ばかりになってしまいました。時間でございますので，機会があったらまたお話しをさせていただきたいと思います。きょうは失礼いたしました。

案内図



1989年 1 月20日

編集
発行　日本工学アカデミー

〒108　東京都港区芝 5 -33- 7　TEL. 03-798-6196
徳栄ビル日本電気㈱内　FAX. 03-798-6197